

## 新刊紹介

## 支那佛教史蹟踏査記

常盤 大定著

昨年春相次いで『譯經總錄』支那佛教の研究の勞作を世に問はれた常盤博士が秋に至るや亦も本書を刊行されて益々その健在振りを發揮されてゐることは後學の畏敬措く能はざるところである。殊に本書は著者が大正九年より昭和四年までの間に決行された前後五回に互る支那佛教史蹟踏査の記録であつて、生命を賭し以て幾多の危険と困難を克服されて後得られた金字塔である。學に對する眞摯なる且熱烈なる態度に甚深の敬意を表するとともに、著者の學風が一つにはかゝる實地の踏査研究に強き根底を有するものであることは云ふまでもなからう。

第一回踏査記「古賢の跡へ」は嘗て公刊されたものであり、内容は鮮滿より北支の太原・雲崗・房山・龍門、中支の荊州・廬山・南京・鎮江・杭州方面の踏査記録にして、文獻に見ゆるところと實地の有様を比較照應され、且この踏査に於ける收獲のうち特筆すべきものとして東晉慧遠祖師の墓塔・北魏曇鸞大師の遺跡道教の石窟等の發見を擧げてある。第二回踏査記「續古賢の跡

へ」も嘗て「支那佛教史蹟」として公刊されたものであり、内容は山東諸地方・北京・洛陽・嵩山・寶山・漢口・武昌・長沙・南嶽・衡山・揚州・蘇州等北支中支の主要部分の踏査記であつて尤も大なる收獲として魏道愷遺刻寶山大窟窟・隋靈裕遺刻寶山大住窟・揚州鹽眞和尚故址等の發見を數へられてゐる。第三回「後の古賢の跡へ」は揚州・寧波・天台山・普陀山・天童山・育王山の江浙地方、北支の南北響堂山・翠巖縣、揚子江流域の黃梅・廬山、及び杭州地方の調査記録であつて、一大發見として南北響堂山石窟を擧げて居られる。第四回「山東巡禮記」は濟南淄川・青州を夫々中心とせる佛教史蹟の踏査記録にして、山東靈巖寺證明龕の發見を尤も大なる收獲として擧げてある。第五回「廣福巡禮記」は廣東・韶州・曹溪南華寺・雲門山・潮州・廈門・福州・鼓山湧泉寺・雪峰崇聖寺・黃檗山萬福寺等、嶺南の諸地方多く禪宗關係の史蹟踏査の記録であつて、尤も大なる收獲は「福州鼓山の三大藏及び佛典」の發見であるとされてゐる。なほ第三・四・五回の踏査記は今始めて印刊に附せられたものである。

右、五回に互る踏査は殆んど全支那に及び、四百餘州著者の足跡の印せざるところなしと云ふべき程にしてその成績極めて顯著なること勿論である。しかも本書の體例は日記體であるが、ありきたりの旅行記ではなく、多くの學術的研究が内にもられ且史料の單なる羅列考證にのみ墮することなく、旅行中の出來事が巧みに織込まれて興味深く、讀者をして知らず／＼支那佛

敦の中に融入せしめる。尤も個々の史蹟に關する調査研究に於ては今日長足の進歩をなせるものがあつて本書に見ゆるすべてが現今學界の最高レベルであるとは勿論云ひ得ないがこれは決して本書の價値を損するものではない。殊に踏査された史蹟は大部分現在我が軍の占領地域内にあるものにして、本書が今後の研究調査の一大指針であることは云ふまでもなからう。巻頭には重要史蹟に關する鮮明なる圖版一五〇があり、なほ附せられたる踏査地圖は著者の足跡を一目瞭然たらしめるものである文中にも必要に應じて適切なる圖が挿入されてゐて、著者の周到なる用意が窺はれる。(四六倍版、七百餘頁、東京龍吟社發行、價拾貳圓)(N)

## 能樂源流考

能勢朝次著

能樂は室町時代に至つて、大和猿樂に觀阿彌、世阿彌の父子出づるに及び、その卓拔なる技倆と明晰なる頭腦とを以つて從來の猿樂はこゝに全く改良され、その面目を一新したのであつたが、又、他面偶々足利將軍家のこれに對する保護、更に引續いて秀吉、家康或はその後代々の將軍等の保護獎勵はその急激なる勃興を促すと共にその大成を容易ならしめ、能樂は遂に武家の式樂とさへなつて連綿數百年間演ぜられ來つたのである。明治の維新は政治體制の一變と共に一時はこの世界にもその影

響の及ばざるを得なかつたのであるが、しかも明治聖代の隆昌と共に再びその流行をなすに至つたこと今日まのあたり目撃するが如きである。

本書はかつて本學教授であつた能勢朝次先生の著である。その序文劈頭に「江戸時代以前に於ける猿樂の發達變遷の歴史を明かにしたいと云ふ念願で、奈良時代から慶長初年頃までの猿樂に就て考察を加へたものである」とあるが如く、この觀阿彌、世阿彌の二大藝術家によつて創始せられた能樂の古態たる猿樂について時代を分けて精細なる研究をなされたものであり、なほ附篇として「田樂攷」も添へられてゐる。云ふまでもなく從來とても猿樂に關するものは古文獻を初めとして、多くはないが數種の著作中にも見え、又少からざる研究論文も已に世に出てゐる。がそれ等の間にあつて本書は斷然隔絶出色せるものと云ふべく、これ程緻密な體系的研究はない。著名な古書古記録中より蒐集した豊富な資料と透見とによつて、先人の學說を批判取り捨し、その研究を體系づけてゆかれるところ誠に論斷の確實さを思はせる。本書内容の大部分は已に御研究の都度諸雜誌に發表されたものであるが過去十年間に互る業績はこゝに堂々千五百數十頁に整理統一されて世に出たのである。左にその目次の一部を略記してその大要を紹介することとする。

### 第一編 平安時代の猿樂

#### 第一章 平安時代の貴族的猿樂

#### 第二章 平安時代の賤民的猿樂

## 第二編 鎌倉、吉野朝時代の猿樂

第三章 咒師考  
第四章 翁猿樂考

第一章 大和猿樂考

第二章 丹波猿樂考、附、殿上侍臣、武士の猿樂

第三章 能の發生とその展開

第四章 伎樂と猿樂との關係

## 第三編 室町時代の猿樂

第一章 大和猿樂考

第二章 宇治猿樂考

第三章 近江猿樂考

第四章 丹波猿樂考

第五章 伊勢猿樂考

第六章 攝津猿樂考

第七章 勸進猿樂考

第八章 手猿樂考

第九章 寺社、武家と猿樂との交渉

第十章 宮廷猿樂考

第十一章 演能曲目考

第十二章 謡曲作者考

## 附篇 田樂攷

第一章 平安時代の田樂

第二章 鎌倉吉野朝時代の田樂

謡曲作者考曲名索引  
事項索引

(岩波書店發行、價拾貳圓)(A)

## 校註 一言芳談

多屋 頼俊編

本書は法藏文庫の第四編として本學豫科教授多屋頼俊氏の編纂したものである。一言芳談の名は兼好の徒然草によつてあまねく世人に知られてゐるところである。而して其の書名は「一言芳談」「一言法談」など記るされ、また「乙言芳譚」など、當字をしてゐる場合も見られる。著作年代について野村八良氏はその著、鎌倉時代文學新論に於て本書は兼好法師の徒然草起草以前、略々鎌倉末葉に成つたものであると言はれてゐる。その著者について徳川時代に出た本書の註釋本では何かと臆測して居るところもあるが、結局「撰者逸於其名不可考也」と言つてゐるところが現在でもなほ間違ひのない所である。内容はその標題によつても察せられるが如く、又、「此書總じて苦修練行の要道をかきたれば一句／＼のこゝろかはりたると見るべし」云々と一言芳談句解の初めにある様に念佛求道者の座右の銘となすべき斯道先覺者達の法語百數十條を「有云……」とか「明遍僧都云……」と冒頭した形で集録したものであつて、特に全編を一貫して纏つた思想と言ふ様なものは見受け難いものである。がその簡結な文章内容に人心を打つ所がある爲であらう、徳川

時代にも慶安元年の板本を初めとして、貞享、元祿にはその註釋本の上梓があり、更にそれ等が板を重ねて居る様である。因にこの貞享及び元祿刊の二註釋本卷末には慶安刊本の卷末識語にはない「類語五十五落下云々」なる文字が同じ様に附加されてゐることは兩者に何等かの關係あることを想像させるものである。明治以後になつてもその本文或は徳川時代に出た註釋本の齧刻等が屢々行はれて何々叢書と言つたものに收められ、又はその簡單な抄出本の單獨に出版せられること等もあつて世に行はれた。近くは大正十二年七月中外日報社から祖師一口法語と合冊で佛教古典叢書中に收められて世に出たが、これは慶安本の齧刻であり、卷初に禿氏祐祥氏の有益な解説が加へられてゐる。刊本に對し、寫本の記るべきものとしては鎌倉時代文學新論中に紹介された東大圖書館藏の寛文二年書寫と云ふものが現今知られてゐる位であらう。法藏館文庫本は刊本として最初の慶安元年本を底本としてそれに對して比較的出入の多い續群書類従本や本文は慶安刊本に據つたと思はれるが、多少の異なる貞享刊行の註釋本「一言芳談句解」や、慶安本の話序をすつかり變更して註解した元祿刊の「標註増補一言芳談抄」等の三本を以てその本文を校合し、その異同を脚註してゐる。又、「一言芳談句解」及び「標註増補一言芳談抄」の註釋は全部、話毎に添へられてゐる。なほ卷初には諸本について精しい解説があり、卷尾には附録として本書にもられた思想内容の概要について記し、併せて神・佛・人名索引が添へられてゐる。之を要するに

本書は一言芳談に關する限り參考すべき刊本の全部をこゝに壓縮したものと言ふべく、その解説と共に一言芳談研究者にとつては好著と言はねばならない。慾を言へば斯かる文庫本については餘り望み過ぎた事ではあるが慶安元年刊本の識語、刊記等の卷尾の一葉を何とかして入れて貰へばとも思ふがこれも私だけの慾張りであり、無くともよい事かもしれない。ともあれ佛教古典叢書本と共に本書の出現は一言芳談の古刊本の割合に得難く只、「標註増補一言芳談抄」の類のみ多く行はれてゐる際に誠によき出版と云ふべきである。(法藏館發行、價六拾錢)(A)

## 『國分寺の研究』

角田 文衛編

國分寺に關する研究の發表は、從來相當多數に上つてゐる。然し乍ら其の傾向は、本書の序に濱田耕作博士が、「たゞ從來の研究多くは考古學的方面、或は文獻的方面の一方に偏し、且つ國分寺各個の考察に即して、之を綜合的に研究せるもの殆ど少かりしは、學界の遺憾とする所なりき」と述べておられる如く文獻又は遺蹟の一方的に偏するものであつた。殊に文獻的研究にあつては、それが沿革のみに力を注ぎ、如何なる組織・如何なる機能によつて作られたものであるかと言ふ點は、殆ど顧みられなかつた様である。而して遺跡にあつては、個別的研究に墮し、全體の立場からの考察は尠かつた。かゝる時京都帝大考

古學研究、室角田文衛氏の編纂に依つて、遺跡の全國的散在や、史料の蒐集の煩雜さを克伏して、氏を初め七十有餘氏の研究成果をもつて、國分寺の綜合的研究がなされ、現文圖版等を併せて、上下二卷二千頁餘の大著が刊行された事は、學界の爲に喜ぶべきことである。而してその渴仰や幾久しきものであつたことを思へば、此の喜びを一層大にするものである。

さて目次に依つて本書の體制を見るに、四編に分れてゐる。

第一編は、國分寺概觀と題し、國分寺の設置、東大寺の草創、國府・國分寺關係の神社、國分寺の塔、國分寺の寺院組織、國分寺の衰頹の諸論攷が取扱はれてゐる。

第二編は、東大寺及び法華寺の研究と題し、東大寺の規模、東大寺領の研究、正倉院・三月堂の文學・建築・美術の立場からの考察、法華寺の沿革等によつて充されてゐる。

第三編は、國分寺各説と題し、畿内、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の八章に分つて、各地國分寺の研究報告が、それぞれの權威者によつてなされてゐる。

第四編は、餘論と題し、古瓦を中心としての國分寺に關する一、二の所見、奈良時代の建築、隋唐の佛教政策並に官寺の研究、及び國分寺研究史が收めてある。

最後に附載として、薩摩國分寺文書と獨文の概要が加へられてゐる。圖版は極めて鮮明にして、百の枚多きに達し、五百餘の挿圖は、記述の理解を容易ならしめてゐる。以つて編者の意圖を察することが出來やう。

以上七十幾編にのぼる論文は、國分寺を凡ゆる角度から研究したものであつて、それぞれ價値あるものであるが、特に編者角田文衛氏の筆になる國分寺の寺院組織の一編は、豊富な史料の蒐集によつて、その規模並に機能を加藍・宗旨・佛像・僧尼・法會・經濟の六項目に分つて究明してゐる點、注目すべきで、是非一讀すべきものであらう。而して氏は國分寺の設置に就てその名稱の研究から往昔は「コクアテラ」或は「コクアツ」となすべきで、その例證として室町時代の文書を出し、一面國語學の立場からも綿密な考證をなし、天平十三年詔勅以前に既に國衛の附近に寺院が存してゐたことを指摘し、國分寺以前に國府寺なる寺院があり、祈願法會の勤修を司つてゐたことを述べ、その證左として古瓦の出土を舉げておられる。此の主張たるや極めて注目すべきものであるが、古瓦のみを以つて證據とするは聊か論旨に徹底を缺く憾みがあるとしなければならぬ。然し前面に史料探索の困難を控えてゐるを思へば、止むを得ないとも考へられる。されどかゝる論説は、吾人に新たな意味に於て將來の問題を提供したものと云ふべきである。(昭和十三年八月一日發行、京都帝國大學考古學研究室、本文一七五九頁、獨文一一頁、圖版百頁、挿圖五百七頁、上下二冊定價四拾圓) 奥村記